

第28回 横浜 いずみ歌舞伎公演

日時 令和7年 10 月 18 日(土)、19 日(日)

13 時開演(12 時 30 分開場)

演目 そがもようたてしのごしょぞめ ごしょのごろうぞう
曾我綉侠御所染(御所五郎蔵)

#住むなら 泉区



会場 泉公会堂(いずみ中央駅徒歩5分)

市民による手作りの本格歌舞伎

入場料 1,500 円(全席自由席) 9 月 1 日販売開始

チケット販売場所 泉区役所1階売店、泉区内各地区センター、泉公会堂

【共催】 横浜いずみ歌舞伎保存会 泉伝統文化保存会 泉区役所

【問合せ】 泉区地域振興課区民事業担当 電話 045-800-2392



『曾我綉俠御所栄』 (そがもようたてしのごしょぞめ)

「序幕 五條坂仲之町甲屋の場」

河竹黙阿弥の初期の作品である今作は、複雑に絡み合う前段も書かれていますが、近年は上演される機会がなく、本日上演されるかたちがほとんどです。

元は陸奥の浅間家の朋輩だった五郎蔵と星影土右衛門。五郎蔵は、浅間家の奥勤めをしていた皐月との『不義』により暇を出され、今は女房となった皐月ですが夜の勤めで傾城となった為に、その皐月を我が物にしようと星影土右衛門が狙っています。

この因縁の二人が五條坂の廓で出会い、一触即発となるどころ、甲屋の女主人が止めに入る事により、その場はおさまりました。

「二幕目 第一幕 同 甲屋奥座敷の場」

その頃甲屋の奥座敷では、皐月が夫の五郎蔵から『殿様の揚げ代にと借りた二百両。これを、今宵中に返さねば生きてはいられない』との手紙を受けとります。その話を聞きつけた土右衛門に、自分の前で五郎蔵に退き状を書けば『二百両』の金を貸してやろうと迫られ、皐月はやむなく退き状を書いて五郎蔵にわざと愛想尽かしをします。

そうとは知らぬ五郎蔵は激高して、尺八を片手に皐月に打ってかかろうとするところを、それを奥で聞いていた、殿様の寵愛する傾城逢州が止めに入りました。

一旦はおさまった五郎蔵ですが、皐月からの手切れ金も受け取らず、土右衛門に意味深な悪態をついてその場を立ち去ります。

夜も更け一緒に帰ろうと言う土右衛門に、皐月は「癪を起こした」その場にふさぎこんでしまいます。それを見た逢州が、自分と皐月が打掛けを替えて夜道をともにしたならば、ちょっと見た目には皐月に見えるであろうと、代わりに土右衛門と花形屋へ向かう事を納得させます。

「二幕目 第二幕 同 廓内夜更けの場」

夜も更けた廓、忍んでいた五郎蔵が、皐月の打掛けと提灯の紋を目印に、逢州を皐月と思いこみ斬ってしまいます。後悔している所へ、どこからともなくあらわれた土右衛門、五郎蔵は雌雄を決すべく立ち廻りとなるうちに幕となります。

